大使館から世界に目を向ける

北京第二外国語学院学生代表

見学日時：2023年12月4日（月）14:00-15:30
見学場所：中華人民共和国駐日本国大使館

見学概要

12 月 4 日午後、私たちは日中友好の歴史を代表する松本楼での昼食を終え、中日両国の輝かしい未来を託す中華人民共和国駐日本国大使館へ向かい、公使及び経済部門である商務部の外務公務員と懇談を行った。そこではまず公使と団長からそれぞれ私たちへ向けた、習総書記の重要談話にある両国の交流における「希望は人々に、基礎は民間に、未来は青少年にある」との言葉を引用した挨拶を頂いた。次に 5 つの大学の学生らは自身の専攻及び今回の日本訪問で見聞きしたことを踏まえた今回の学習の成果を公使へ報告した。そして最後に国旗と国章の下で記念撮影をし、今回遠路はるばる他国を訪れた団員らは祖国の温かみと世界の広さを感じることができた。

ご存じですか？

(1) 中華人民共和国駐日本国大使館の所在地は中国の領土である。場所は日本にあるが、中国の出先機関である大使館は中国の領土であるため、大使館に向かう道中、皆は「家に帰れる」と期待に胸を膨らませていた。

(2) 中国の原油の発展状況は全体的に上向きとなっている。中国石油大学の学生からの質問をきっかけに、公使からは、中国は現在油田における生産量が増加を続けており、その中でも長慶油田は 2021 年に石油・ガス生産量が 6244 万トンに達するなど過去最高の生産量を記録している。また大慶油田は 2021 年に国内外での石油・ガス生産量が 4322 万トンに達し、前年比で 19.6 万トン増加している。さらに勝利油田は 2019 年に帳簿上の黒字を実現し、損益分岐点が低下を続け、1 バレル 50 ドルに向けた重要な一歩を踏み出し、5 年続いた赤字を一気に黒字転換しているなど、全体的に中国の各油田は安定的に発展しており、新たなブレイクスルーや進展を実現し続けているという旨の幅広い知識の紹介を頂いた。

感想

外務公務員は「芥子の中に須弥山あり（小さな中にも大きなものを秘めている）」と言える。小さな大使館内には驚くほどの量の知識が秘められていて、駐在国の国情の観察だけでなく、より多くの角度から自国に足りない点や世界の動向を観察している。公使は私たち各学校の専門分野に沿った形で私たちとそれぞれ交流を図ってくれた。

北京大学の物理学専攻の学生との交流では、公使からは日本の理工系技術の先進性について紹介があり、技術面に関しては、日本にも半導体露光装置技術があり、キヤノンや信越化学は世界的にも優れたフォトレジスト技術を

保有している、また中国の初期の高速鉄道は日本の新幹線技術を手本に学んでいるということを知った。政策面に関しては、中国のハイテク産業の輸出入に対し原料の規制を行うとの『経済安全保障推進法』の実情、特にアメリカの規制リストに追従する形で半導体の規制を実施している点について知り、中国のハイテク技術の成熟や自立にはまだ多くの課題や長い道程が残っていることを認識させられた。それと共に理工系の学生に対し、祖国を忘れず、科学の道を学ぶと同時に国に報いるとの志を常に心に抱くように、との言葉が寄せられた。

次に、日中経済の研究や比較の状況についての紹介となった。今回の訪問を通して私たちは日本の企業についてより踏み込んだ理解をすることができた。日本には総合商社に代表される純粋な資本型の企業もあるが、パナソニックやソニーといった伝統的な企業は社会的に驚くほど高い責任感を有している。

私有財産制度下の企業が大量の社会資源を占有するほど発展した場合、往々にして独占的形態となりその規模の大きさによりさらなる競争上の優位性を獲得しがちであることは知っての通りであり、中国でも滴滴や美団等の企業は先に損益を出してでも市場を占拠することで独占的効果や収益を得ている。だがパナソニックは 1932 年つまり同社の「命知元年」に産業人の真の使命は社会に貢献することであるとの点を打ち出している。パナソニックは独占により自社だけが大きくなることで物価を引き上げることをせず、逆に供給を十分に行うことを重視している。これは資本主義の本質である「利益の追求」に反する偉大な決断だと言える。また資本主義は生産を根本の目的とはしていない。知っての通り、富の成長には創造と転換という 2 つの手段しか存在しない。創造は即ち生産であり、皆が共にパイを大きくしていくということであり、転換は交換である以上に搾取であるとも言える。資本ストックが一定の度合に達した際、搾取の方式は「何もせずとも収益が得られる」ものとなる。なぜなら資本の略奪能力は生産に勝るからである。だがパナソニックはそれに逆らうように、すでに資本ストックが日本一となった状態で、水道哲学により人々が低廉な価格で商品を獲得できるようにすることをモットーにパイを大きくした。これは「人類運命共同体」と完全に符合した偉大な理念である。

今回の異国での「帰宅」の旅を通して、私たちは優しさと力を感じることができた。これから先、私たちが「未来は青少年」との願いを実践し、帰国の後も引き続き知識を追求し、困難に負けず前進していくことを確信している。